

## ■ 掲示板

### □ 国内外の関連会議情報

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催方法が変更になっている可能性があります。ご参加を予定している場合は、主催元のホームページ等で最新の情報をお確かめ下さい。

開催期間	行事名	開催場所	関連ウェブページ
2022年 7/5–8/31	第3回オンライン真空講習会入門講座	オンライン開催	<a href="https://www.jvss.jp/">https://www.jvss.jp/</a>
8/7–12	NAPAC2022—North American Particle Accelerator Conference	Albuquerque, New Mexico, USA	<a href="https://attend.ieee.org/napac-2022/">https://attend.ieee.org/napac-2022/</a>
8/8–11	第19回加速器学会年会	北九州国際会議場 (福岡県北九州市)	<a href="https://www.pasj.jp/dai19kainenkai/index.html">https://www.pasj.jp/dai19kainenkai/index.html</a>
8/18–26	第16回 大学生のための素粒子・原子核スクール サマーチャレンジ	オンライン開催	
8/22–26	FEL2022—The 40th International Free Electron Laser Conference	Trieste, Italy	<a href="https://www.fel2021.org/">https://www.fel2021.org/</a>
8/28–9/2	LINAC2022—The 30th LINAC Conference	Liverpool, UK	<a href="http://linac2022.org/">http://linac2022.org/</a>
9/5–10/31	第3回オンライン真空講習会 第2回オンライン真空応用技術講座	オンライン開催	<a href="https://www.jvss.jp/">https://www.jvss.jp/</a>
9/6–9	高エネルギー加速器セミナー「OHO' 22」	ハイブリッド開催(高エネルギー加速器研究機構つくばキャンパス+Zoom)	<a href="https://conference-indico.kek.jp/event/175/">https://conference-indico.kek.jp/event/175/</a>
9/11–16	IVC 22—The 22nd International Vacuum Congress	札幌コンベンションセンター	<a href="https://ivc22.org/">https://ivc22.org/</a>
9/18–22	EAPPC & BEAMS 2022—9th Euro-Asian Pulsed Power Conference and 24th International Conference of High-Power Particle Beams	Seoul, Korea	<a href="https://www.eappc-beams2022.org/">https://www.eappc-beams2022.org/</a>
10/3–6	ERL2022—66th ICFA Advanced Beam Dynamics Workshop on Energy Recovery Linacs	Ithaca, NY, USA	<a href="https://www.classe.cornell.edu/NewsAndEvents/ERL2022/">https://www.classe.cornell.edu/NewsAndEvents/ERL2022/</a>
10/6–9	WIRMS2022—11th International Workshop on Infrared Microscopy and Spectroscopy with Accelerator-Based Sources	ハイブリッド開催(グランドプリンスホテル広島+オンライン)	<a href="http://www.spring8.or.jp/en/WIRMS2021/">http://www.spring8.or.jp/en/WIRMS2021/</a>
10/9–13	LLRF22—Low Level Radio Frequency (LLRF) workshop 2022	Brugg-Windisch, Switzerland	<a href="https://indico.psi.ch/event/12911/">https://indico.psi.ch/event/12911/</a>
10/16–21	ALC' 22—14th International Symposium on Atomic Level Characterizations for New Materials and Devices' 22	万国津梁館(沖縄県)	<a href="https://www.jvss.jp/division/mba/alc/alc22/">https://www.jvss.jp/division/mba/alc/alc22/</a>
10/26–28	日本中性子科学会第22回年会	幕張メッセ国際会議場	<a href="https://jsns2022.jp/">https://jsns2022.jp/</a>

2023年 5/7-12	IPAC23—The 14th International Particle Accelerator Conference 2023	Venice Lido, Italia	<a href="https://www.ipac23.org/">https://www.ipac23.org/</a>
6/25-30	ISDEIV2023—30th International Symposium on Discharge and Electrical Insulation in Vacuum	沖縄県市町村自治会館（沖縄県那覇市）	<a href="http://isdeiv2023.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html">http://isdeiv2023.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html</a>
8月	第20回加速器学会年会	千葉県船橋市	

## ■ALC'22 (14th International Symposium on Atomic Level Characterizations for New Materials and Devices '22)

主催：公益社団法人日本表面真空学会

開催期間：2022年10月16日(日)～21日(金)

開催地：万国津梁館（沖縄県名護市喜瀬1792）

日本表面真空学会マイクロビームアナリシス技術部会主催の国際シンポジウム ALC'22 (14th International Symposium on Atomic Level Characterizations for New Materials and Devices '22) につきまして、ALCの伝統である世界のトップレベルの研究者との出会いと活発な議論の場を設け、魅力がある様々な企画を提供する予定です。

連絡先：Secretary of ALC'22 Steering Committee  
中原仁 E-mail: [alc@jvss.jp](mailto:alc@jvss.jp)

## □関連団体からの報告

### ■公益財団法人 高エネルギー加速器科学研究所 奨励会 西川賞・小柴賞・諏訪賞受賞者について

#### 1. 西川賞

受賞者氏名：和田道治（高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所 教授）・宮武宇也（高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所 名誉教授）

研究課題名：KISS（元素選択型質量分離装置：KEK Isotope Separation System）と MRTOF-MS（多重反射型飛行時間測定式質量分析器：Multi-Reflection Time of Flight Mass Spectrograph）の設計・建設・運転

授賞理由：KEK 素粒子原子核研究所の和田道治氏と宮武宇也氏は、理化学研究所和光キャンパス内にある素粒子原子核研究所和光原子核科学センターに、KISS（元素選択型質量分析装置）と呼ばれる質量分析装置を設計・建設し、金・白金やウラン・トリウムなどの重元素合成の起

源天体を解明する研究プロジェクトを進めてきた。両氏は多核子移行反応が、この領域の不安定中性子過剰原子核の生成に有効であることを実証し、これによって生成された不安定核を迅速にガス中で捕獲して、イオンのままあるいはレーザーイオン化の手法を駆使して低エネルギーの短寿命核ビームとして引き出す手法を開発した。上記のイオン操作技術は、ヘリウムガス中で減速・熱化した放射性同位体イオンを、高周波カーペットを用いて高速・高効率で補修し冷却された RI ビームに成形するものであり、あらゆる元素の高精度分光を可能としている。更に、KISS に多重反射型飛行時間測定質量分析器 (MRTOF-MS) を組み込んで、多種の原子核を分離せずに同時に高能率測定することが可能となり、短寿命原子核の質量を約  $10^{-6}$  の高分解能で網羅的に測定することに成功した。これにより、多核子移行反応により生成した中性子過剰不安定同位体の系統的な精密核分光研究が初めて可能となった。

これを受けて、上記研究プロジェクトでは、放射性同位体の寿命、質量、崩壊様式、核モーメント、核荷電半径等の系統的測定が推進されている。宇宙における金・白金・ウラン、トリウムなどの重元素合成の謎に迫る研究に新たな道を切り拓くことが期待される。

コンパクトで可搬性にもすぐれたこの装置は、測定対象の原子核に応じて多様な設置が可能であり、超重元素領域での原子質量測定においても威力を発揮している。

以上のことから和田・宮武両氏の本業績は、西川賞にふさわしい研究であると判断された。

#### 2. 西川賞

受賞者氏名：西村昇一郎（高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所 特別助教）・神田聡

太郎 (高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所 助教)・下村浩一郎 (高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所 教授)・鳥居寛之 (東京大学大学院理学系研究科 准教授)・田中香津生 (Paul Scherrer Institute PSI fellow)

研究課題名：ミュオニウム超微細構造精密測定におけるラビ振動分光の研究

授賞理由：本研究グループは、原子分光分野における新しい「ラビ振動分光」と呼ばれる手法を開発、実証した。通常の原子分光は、構成粒子の精密な情報を得るために、照射する光や電磁波の周波数を変化させながら吸収の大きくなる共鳴周波数を求めるのが一般的であるが、パワー変動などの要因により、精密測定が難しいという問題を抱えている。特に短寿命原子などの測定では、信頼性のある結果が得られていない。本グループでは、周波数を固定したままで、パワーに応じた時間応答を観測し、ラビ振動と呼ばれる現象を観測することで、その問題を克服しようとしてきた。ラビ振動とは、共鳴周波数からのずれと、パワーに応じて、時間応答が振動を示す現象であり、その存在自体は知られていたが、分光に応用した例はなかった。本グループは、J-PARCにおいて、 $\mu^+$ 粒子と電子からなるミュオニウムを生成し、そのラビ振動を観察、それをシミュレーションと比較することによって、共鳴周波数を正確に導き、従来の精度を一桁凌駕する結果を得られることを示した。これにより、素粒子ミュオン(ミュオン粒子)の質量を高精度で決定して、量子電磁力学(QED)をはじめとする素粒子物理学の標準模型を検証することができることが期待されている。

本成果は、世界をリードする成果であるとともに、今後J-PARCの性能が強化された暁のミュオン利用にさらなる発展が期待できる成果である。

以上のことから西村・鳥居・神田・田中・下村5氏の本業績は西川賞にふさわしい研究であると判断された。

### 3. 小柴賞

受賞者氏名：中村光廣 (名古屋大学未来材料システム研究所 教授)・中野敏行 (名古屋大学大学院理学研究科 講師)

研究課題名：原子核乾板の技術革新と素粒子・宇宙線実験等への応用

授賞理由：原子核乾板はミクロンオーダーの高い位置分解能を持ち、昔はよく使われていたが、顕微鏡を用いて人が飛跡を探すため解析に時間がかかるため、検出面積を大きくできないという問題があった。

中村光廣、中野敏行両氏は、原子核乾板をステージで動かし、顕微鏡を通した乾板の像をデジタル化し、それをコンピュータで解析して、飛跡検出を自動化するシステムを作り上げた。撮像素子やコンピュータやIT技術の発展とともに、この自動飛跡検出技術も発展させ、原子核乾板をスキャンする速度は1980年ごろから6桁も向上している。

さらに、フィルムメーカーが乳剤を作らなくなったのを機に技術移転を行い、自前で各研究の目的に合わせた乳剤を開発し、乾板を作る技術も確立した。

これらの技術開発の結果、米国Fermilabでタウニュートリノを世界で初めて検出した。また大量の原子核乾板を用いて、ヨーロッパCERNから飛ばしたミュオンニュートリノが振動してタウニュートリノに変わる反応を初めて観測した。

さらに中村氏が教授となってからは、原子核乾板の応用範囲を大きく広げた。例えばT2K実験でニュートリノの原子核反応を調べたり、気球で原子核乾板を上空に上げて高い角度分解能で天体からのガンマ線の方向を調べたり、宇宙線を用いて溶鉱炉やピラミッドや火山や原子炉を透視したり、粒子線がん治療への応用も行っている。さらに乳剤の改良によって、暗黒物質の探索を行い、超冷中性子を用いた重力の研究なども計画している。

中村氏は特に乳剤の開発と原子核乾板の応用、中野氏は飛跡の読み取りシステムの開発を主導してきており、両者の貢献は顕著である。また、彼らの開発した高速読み取りシステムは独創的で世界で随一であり、タウニュートリノへの振動実験など、国際的にも高い評価を得ている。

以上のことから中村、中野両氏の本業績は、小柴賞にふさわしい研究であると判断された。



#### 4. 諏訪賞

受賞者氏名：上坂 充（内閣府原子力委員会 委員長）

研究課題名：先進小型電子ライナックの開発と利用推進

授賞理由：候補者である上坂氏は、長年にわたってSバンド・Xバンド電子ライナックおよびレーザー加速システムの研究開発を行うとともに、利用施設を高度化して加速器利用研究を推進してきた。

まず、東大原子力工学専攻のSバンド電子ライナックにおいて、1990年代に世界に先駆けて数百フェムト秒の極短パルスを生じさせることに成功した。さらにこの電子パルスとレーザー光を高精度かつ高安定度で同期させ、ピコ秒時間分解ラジオリシスに供することができるよう、加速器施設を高度化した。その後も施設の高度化のための開発を継続的に行い、共同利用研究所として加速器利用研究に貢献し続けている。

次に、Xバンド電子ライナックにおいては、社会的課題への応用を目指して、可搬型の加速器を開発してきた。企業との共同研究によって開発された最新のシステムでは、加速管に $\pi/2$ モードを採用してビーム負荷の下での安定動作を実現し、構造用コンクリートや道路橋の劣化診断に用いられようとしている。

さらに、レーザー加速においては、2000年代初頭から放射線化学への応用を目指して装置開発を行い、放電キャピラリプラズマチャネルとソレノイド磁場を用いて準単色電子ビームを生じさせることに成功した。また、最近ではレーザー誘電体加速装置の設計開発も行っている。

上坂氏はこれらの研究開発で170本の研究論文を発表しているほか、国際会議などで多数の招待講演を務め、多くの賞を受賞するなど、国際的評価も高い。さらに、これらの研究開発を通じて、数多くの人材を育成して学会や産業界に輩出してきた。

以上のように、上坂氏は長年にわたって加速器科学の発展に貢献し、顕著な業績を上げており、諏訪賞にふさわしい研究であると判断された。

#### 5. 諏訪賞

受賞者氏名：Geant4日本グループ 代表 佐々木 節（高エネルギー加速器研究機構計算科学センター 教授）・浅井 慎（Thomas Jefferson 研究所 シニア研究員）・藏重久弥（神戸大学大学院理学研究科 教授）・村上晃一（高エネルギー加速器研究機構計算科学センター 准教授）

研究課題名：物質と放射線との反応シミュレーションプログラム：Geant4の国際的な開発運用

授賞理由：Geant4は放射線と物質との相互作用のシミュレーターとして、現在、世界で最も広く利用されている。加速器を用いた実験はもとより、人体への放射線の影響評価などを含む幅広い分野で、今やなくてはならないツールとして知られている。

Geant4は、CERNで開発され1990年代まで高エネルギー実験の分野で使われてきたGeant3を根本から見直し、オブジェクト指向言語C++を用いてゼロから再構築したものである。

日本グループが立ちあげたその開発計画は、CERNをはじめアメリカやヨーロッパ諸国の主要な機関が参加して国際的な開発プロジェクトに発展した。そして1998年、Geant4の初版がリリースされるが、日本グループの貢献は極めて大きく、初版のコードにおいて日本グループが担当した部分は全体の半分にのぼった。日本グループは初版のリリースと同時にその普及と保守のための国際的な枠組作りも主導し、各機関やICFAと交渉してMoUによる国際的プロジェクトGeant4 Collaborationを立ちあげた。このコラボレーションにおいても代表者の4名をはじめとする日本グループが重要な役割を果たしながら現在にいたっている。

Geant4はLHCでのHiggs粒子の発見に大きく貢献し、Belle/Belle II、T2Kをはじめとする数々の高エネルギー実験において不可欠なシミュレータである。さらに、日本グループはGeant4の高エネルギー実験以外の分野への応用の拡大にも積極的に取り組んできた。特に粒子線治療においては、放射線効果のシミュレーション結果を人体画像とともにグラフィック表示するユーザーインターフェースを含めて開発し、国内のいくつもの粒子線治療施設で実用に供されている。最近では、GPUを利用した超

並列計算に適応した Geant4 の開発を進めるとともに、宇宙空間における放射線の遺伝子への影響を詳細に評価する宇宙医療分野の課題に KEK およびボルドー大学等と共同で取り組んでいる。

以上のように、Geant4 日本グループは長年にわたって加速器科学の発展に貢献して顕著な業績を上げており、諏訪賞にふさわしい研究であると判断された。

## ■公益財団法人高エネルギー加速器科学研究奨励会奨励賞候補者募集要項（2022年度）

**趣 旨：**加速器ならびに加速器利用に関わる研究において、特に優れた業績をおさめた研究者・技術者に次の4賞で構成される奨励賞を授与し、もって加速器科学の発展に資することを目的とする。

### 各賞の応募条件：

**西川賞：**高エネルギー加速器ならびに加速器利用に関する実験装置の研究において、独創性に優れ、国際的にも評価の高い業績を上げた単数または複数の研究者及び技術者

**小柴賞：**素粒子分野などの基礎科学における測定器技術の開発研究において、独創性に優れ、国際的にも評価の高い業績を上げた単数または複数の研究者及び技術者

**諏訪賞：**高エネルギー加速器科学の発展上、長期にわたる貢献など特に顕著な業績があったと認められる単数または複数の研究者及び技術者ならびに研究グループ

**熊谷賞：**研究開発、施設建設など長年の活動を通して、加速器や加速器装置への顕著な貢献が認められる企業の単数または複数の加速器関係者

**表彰件数：**4賞合わせて5件程度

**賞の内容：**賞金（各賞30万円）及び表彰盾（各課題毎）を授与する。

**選考方法：**推薦のあった者について公益財団法人高エネルギー加速器科学研究奨励会選考委員会で選考し、理事会において決定する。

**選 考：**2022年12月上旬

**提出書類：**(1)推薦書（当財団のホームページに掲載の様式による）

(2)選考資料 研究業績に関する発表論文（3編以内）のコピー（各2部）

**受付期間：**2022年9月1日（木）～2022年11月30日（水）必着

**書類の提出ならびに問合せ先：**公益財団法人 高エネルギー加速器科学研究奨励会事務局  
〒305-0801 茨城県つくば市大穂1-1 高エネルギー加速器研究機構内 TEL・FAX：029-879-0471, E-mail：info@heas.jp, ホームページ：<https://www.heas.jp/>

## ■会告

### ■第35回日本加速器学会評議員会議事録

**日 時：**2022年4月21日（木）15:00-17:00

**場 所：**国際文献社会議室 ウェブ会議（Zoom）

**出席者：**栗木 雅夫（会長／広島大学大学院）、田村 文彦（広報幹事／第10期評議員／日本原子力研究開発機構）、川瀬 啓悟（編集幹事／量子科学技術研究開発機構）、紀井 俊輝（庶務幹事／京都大学）、原田 寛之（行事幹事／日本原子力研究開発機構）、三浦 孝子（会計幹事／第10期評議員／高エネルギー加速器研究機構）、羽島 良一（前会長／第10期評議員／量子科学技術研究開発機構）、宮本 篤（前広報幹事／第10期評議員／東芝エネルギーシステムズ（株））、柏木 茂（前編集幹事／第10期評議員／東北大

学）、加藤 龍好（前庶務幹事／第10期評議員／高エネルギー加速器研究機構）、仲井 浩孝（前行事幹事／高エネルギー加速器研究機構）、長谷川 和男（前会計幹事／第10期評議員／量子科学技術研究開発機構）、岩下 芳久（京都大学複合原子力科学研究所）、惠郷 博文（高エネルギー加速器研究機構）、大谷 将士（高エネルギー加速器研究機構）、帯名 崇（高エネルギー加速器研究機構）、小磯 晴代（高エネルギー加速器研究機構）、小林 幸則（高エネルギー加速器研究機構）、坂上 和之（東京大学）、佐藤 潔和（東芝エネルギーシステムズ株式会社）、全 炳俊（京都大学）、仙波 智行（（株）日立製作所）、徳地 明（株式会社パルスパワー技術研究

所), 飛山 真理 (高エネルギー加速器研究機構), 濱 広幸 (東北大学), 早野 仁司 (高エネルギー加速器研究機構), 本田 洋介 (高エネルギー加速器研究機構), 増澤 美佳 (高エネルギー加速器研究機構), 湯城 磨 (スカンジノバ・システムズ株式会社)

**オブザーバ (第9期評議員):** 神谷 幸秀 (高エネルギー加速器研究機構), 上垣外 修一 (理化学研究所), 田辺 英二 (株式会社エーイーティー), 阪井 寛志 (高エネルギー加速器研究機構), 中村 剛 (高エネルギー加速器研究機構), 大垣 英明 (京都大学), 黒田 隆之助 (産業技術総合研究所)

## 議 事:

0. Zoom 会議にて開催し, 栗木会長を議長に, 音声に問題なく議事進行に支障がないことを確認した。また, 議決権をもつ第10期評議員の出席者数が定足数を満たしていることの確認が行われた。

1. 宮本前幹事より, 広報・ウェブ委員会の報告があった。例年通り WEB 更新等を行っており, 現在は2年ぶりに現地開催が予定されている第19回年会の準備を行っている。学会誌閲覧ページでは編集委員会と連携し過去学会誌 PDF の一部登載を行った。Twitter についてはこれまで羽島前会長が積極的に関連情報を配信しており, 今後と同様の運営ができるよう体制を検討する。

2. 柏木前幹事より, 編集委員会活動報告があった。4月の編集委員会で既に川瀬新幹事に引継ぎを行ったほか, 一部委員に交代があった。学会誌の特集号, 特集に関連した他学会との交流シンポジウム等は例年通り企画しており, テーマを編集委員会で検討している。バックナンバーの閲覧は会員専用ページにログインすると J-STAGE の PW が送られる設定で, 閲覧数の集計も総会で発表予定である。そのほか, 企業への広告掲載依頼の呼びかけがあった。

3. 加藤龍好前幹事より, 庶務幹事報告があった。共催・協賛・後援イベントは2021年開催分以降で合計20件あり, これまで開催されたものはオンライン開催が多かったが, 5月以降の開催ではハイブリッドや現地開催予定が多い傾向にある。

会員数については, ここ1年では微減となった。これについて全評議員より, 微減の理由が判

明しているか質問があり, 特に調査をしていないものの, 会費値上げで懸念されていた退会数増加はなく, 一方でやや入会者が減っていたことが報告され, 傾向を確認することになった。

入会申込者 (個人4名, 賛助1, 購読1) の説明があり, 賛成多数で承認された。続いて3年にわたり滞納状態にある会員について説明があり, 5月末時点で会費納入がない場合, 滞納退会とすることが賛成多数で承認された。

学会賞は奨励賞, 技術貢献賞, 特別功労賞に各1件ずつ申込が来ている。選考委員7名について賛成多数により承認された。選考委員は学会賞以外に, 外部団体の賞への学会推薦を行い, 現在は日本学術振興会育志賞, 東レ科学振興会, ヒロセ賞, 山田科学振興財団, 日本学術振興会賞が対象である。徳地明評議員より学会から推薦したが採択されなかった場合, 理由の通知がなされるか質問があり, 理由の通知はなく, 落選には競争率の高さも影響していることが説明された。

岩下評議員, 内藤富士雄氏が担当している中性子連携 TF については, コロナ禍のため活動がなかったことが報告された。

第10期幹事会として, 栗木会長より以下のメンバーが指名されていることが報告され, 賛成多数により承認された。

広報幹事 田村 文彦 (原子力機構)

編集幹事 川瀬 啓悟 (量研機構)

庶務幹事 紀井 俊輝 (京都大学)

行事幹事 原田 寛之 (原子力機構)

会計幹事 三浦 孝子 (高エネ研)

栗木会長より, 定款9条に基づく会長代理候補として, 羽島良一氏が指名され, 満場一致で承認された。

加藤庶務幹事より, 年会在感染対策等の事情によりオンライン開催となった場合, 総会を前年同様のオンライン形式での開催とすることが提案され, 満場一致で承認となった。

4. 仲井前幹事より, 行事委員会報告があった。委員会は幹事の交代のみで, メンバーに変更はない。第18回年会はオンライン開催としては盛況といえる422名の参加があり, 現地会場費をキャンセルした分が返金されたため, 結果的に986,411円の黒字となった。

現在準備中の第19回年会は北九州市での現地開



催を想定して準備を進めているが、北九州市コンベンション協会からの資料では、会場参加者数の推奨上限が定員の3分の2になっており、これを想定すると、300人の会場が200名制限になるほか、企業展示・ポスター会場にも影響があると考えられ、会場の再検討が必要となる。ただし、会場ホームページの公示では、必要な対策を行った上で5,000人以下であれば開催できることになっている。これについて、開催方法を議論した結果、現地開催で進め、現地での緊急事態宣言が出た場合はオンライン開催に移行するが、蔓延防止等重点措置にとどまる場合や、東京など他地域での宣言の場合は決行する方針となった。なお、7月ごろの状況によりオンライン開催に変更となった場合、準備の都合により2ヶ月程度会期が後になる見込みである。居住地域や勤務先地域の状況で参加不能になる場合に対応し、キャンセルによる返金は一定期間受け付けている。ハイブリッド開催はしないが、移動制限等により口頭発表者が現地参加できない場合にはオンライン接続して講演を行うなどの方法を行事委員会で検討する。

続いて仲井行事幹事より第20回年会の準備状況が説明された。開催地は日本大学理工学部(船橋市)を予定しているが、コロナの影響で学年暦が未定となっており、日程決定が難しい。また、展示用の広い会場が確保できず、企業展示とポスター展示を少数ずつ分けて教室で行うことになる見込みである。

第21回年会は山形大学に共催を依頼し、花笠祭りの時期を避けた日程で山形市での開催準備を進めている。見学は山形大学医学部重粒子センター、高感度加速器質量分析センターを予定している。

5. 長谷川前幹事より、会計幹事報告がなされた。2021年度の決算案は評議員会での決算の仮承認後、監査で確定し、再度評議員会でメール審議ののち納税を行う。収入については会費値上げもあり予算に近い数字となっている。支出はJ-STAGE掲載費用が増加したほか、コロナ禍に起因して各種会議旅費、オーラルヒストリー編纂費が0円になった点、予定していたAccelerator and Medical physicsの英文校閲費が作業の遅れにより翌年度に移行した点、男女共同参画学協会連絡会の会費が追加になった点が説明された。また、年会がオ

ンライン開催となったため、想定より収入増加、支出が減少しており、全体として予算より繰越金が増加した。2021年度決算については、満場一致で仮承認となった。

2022年度予算案については、収入は同程度を想定、支出は過去発行分学会誌のJ-STAGEへの掲載のほか、若手支援として60万円を計上し、全体に181万円程度の黒字を想定している。

このほか、ボランティア依存となっている年会発表申し込みシステム、選挙システムについて、今後の予算を検討すべき可能性があることが報告された。

長谷川前幹事より、監査方法について、国際文献社で現物を確認する方針ではあるが、状況急変にそなえ、オンラインも可とする提案があり、異論なく承認された。

6. 栗木会長より、坂上評議員を企画幹事(仮)として、若手支援策等の検討を行う委員会の設置提案があり、坂上評議員よりこれまでの経緯と今後の企画案について説明があった。「若手」は年齢を設定していないが、学会会議の設定に基づき45歳以下を想定している。本田評議員より、企画特別委員会(仮)の活動が若手に限定するか質問があり、若手を主体とするが、その他の方にも協力を依頼したいとの説明があった。企画幹事(仮)として坂上評議員の就任と、2年の時限措置として企画特別委員会(仮)の設置が満場一致で承認、本活動にともなう予算項目の新設について、賛成多数で承認となった。軌道にのり、継続した活動が求められる場合は、常置委員会への変更を議論するほか、企画幹事、企画委員会という名称について、引き続き検討する。活動の範囲としては男女共同参画を包括し、持続可能な学会運営に資する取り組みの検討を主とする。

続いて、坂上評議員から企画委員会として100万円の措置希望に対し、幹事会で検討し60万円とした予算案の説明があり、この内容を含めた2022年度予算案について、満場一致で承認された。

このほか、羽島前会長より、Metaps Paymentの情報漏洩について、2月に現状把握した後、会員に報告を行ったことが説明された。

栗木会長より、そのほかの議題の確認がないことが確認され、散会した。

## ■会員移動 (2022年4月～2022年5月)

[個人会員入会]

足立 智 (東北大学)  
石田 正紀 (高エネルギー加速器研究機構)  
伊藤 史哲 (高エネルギー加速器研究機構)  
Oumbarek Espinos Driss (大阪大学産業科学研究所)  
江原 悠太 (住友重機械工業株式会社)  
太田 紘志 (分子科学研究所)  
大塚 崇光 (宇都宮大学)  
小川原 亮 (京都大学)  
小田 航大 (茨城大学大学院)  
小原 脩平 (量子科学技術研究開発機構)  
貴田 祐一郎 (高輝度光科学研究センター)  
橘高 正樹 (大阪大学)  
倉田 正和 (高エネルギー加速器研究機構)  
小林 史憲 (日本原子力研究開発機構)  
佐波 俊哉 (高エネルギー加速器研究機構)  
田地野 浩希 (広島大学)  
伊達 圭祐 (広島大学)  
門叶 冬樹 (山形大学)  
中島 秀 (住友重機械工業株式会社)  
永山 晶大 (東北大学大学院)  
沼井 一憲 (高エネルギー加速器研究機構)  
服部 幸平 (東北大学)

松井 昇大朗 (大阪大学)  
丸山 卓也 (株式会社 岡崎製作所)  
山田 智宏 (高エネルギー加速器研究機構)  
吉村 宣倅 (京都大学)  
米倉 章平 (東北大学)  
李 耀漢 (京都大学大学院)  
Omet Mathieu (高エネルギー加速器研究機構)

[賛助会員入会]

中央電子株式会社

[購読会員入会]

株式会社 NAT

[個人会員退会]

3名

[購読会員退会]

1社

## ■訃報 (2022年4月)

以下の会員が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

岡本 正

## ■編集後記

21世紀になって、東日本大震災、パンデミックやロシアによるウクライナ侵攻など、これまでの当たり前前の毎日が、実は危ういバランスの上に成り立っていたことを思い知らされました。こうした脅威に対して、加速器がどの程度対抗手段を提供できるのかは難しいところですが、何のために加速器を研究しているのか、あらためて考えさせられます。

さて、加速器学会誌の編集委員を仰せつかって20年が経とうとしています。加速器学会誌は間もなく20巻の発行を迎えますので、最初から編集に携わってきたこととなります。当初は、他の学会誌なども参考に、加速器学会誌ならではの記事を充実させたいと意気込んでいましたが、実際には記

事を書いてくれる人をさがすことに汲々とするばかりで、なかなか思うようには進みませんでした。何とか良い記事を皆さんに読んでもらい、また良い記事を自主的に投稿してもらえる学会誌にしたいと努力してきたつもりですが、今もって執筆者さがしに毎回苦勞する編集委員会に、忸怩たる思いでいっぱいです。加速器学会誌は当たり前前に刊行されている訳ではなく、毎回必要ページ数が確保できるかどうかの瀬戸際にあります。皆さんからの投稿を切にお願いする次第です。

高エネルギー加速器研究機構  
設楽 哲夫